

# アイヌ語の複雑述語における接続と接合

岸本 宜久

## Juncture and Nexus in Complex Predicates in Ainu

Yoshihisa KISHIMOTO

**要旨**：本稿では、Role and Reference Grammar における Layered Structure of the Clause の点からアイヌ語の複雑述語における二つの動詞の接続・接合関係について分析した。その結果、「V1+wa+V2」構文は内核接続・連位接合、「V1+V2」構文のうち V2 が他動詞の場合は中核接続・従属接合、V2 が自動詞の場合は内核接続・従属接合という構造の相違がある可能性を指摘した。また、これにともなう V1 と V2 における自他の複合制約についても若干の考察を行った。

**キーワード**：アイヌ語 沙流方言 複雑述語 RRG LSC

### 1. はじめに

アイヌ語<sup>1</sup>の述語形式は基本的にひとつの動詞で構成されるが、二つの動詞でもってひとつの述語としてふるまうこともある。このような述語を複雑述語と呼ぶが、アイヌ語では以下のような構文で見られる（引用中の強調は筆者による加筆）。

(1) umma ø-as cikuni ku-ø-kote wa k-ø-anu.  
馬 3S-立つ 木 1S.SG-3O-~に繋ぐ て 1S.SG-3O-置く  
「私が馬を立ち木に繋いでおいた」

佐藤（2008：87）

(2) tane menokopo ø-suke wa ipe-an okere kor  
今 娘 3S.SG-炊事する て 食べる-1S.PL 終わる と

<sup>1</sup> 服部（1964：34）に倣い、本稿で示すアイヌ語表記の音素とおよその音価は、/p/[p]、/t/[t]、/k/[k]、/c/[tɕ]、/s/{s/→[s]/\_ [a]、/\_ [u]、/\_ [e]、/\_ [o]}、{/s/→[e]/\_ [i]}、/m/[m]、/n/[n]、/r/[r]、/w/[w]、/y/[j]、/h/{h/→[ɸ]/\_ [u]}、{/h/→[h]/\_ [a]、/\_ [e]、/\_ [o]}、{/h/→[ç]/\_ [i]}、/ʔ/[ʔ]の12子音と/i/、/e/、/a/、/o/、/u/の5母音である。なお、全てのアイヌ語テキストは引用に際して上記の音素表記に筆者が統一して書き改めている。声門閉鎖音/ʔ/は基本的に表記を省略した。また、音素表記したテキスト中にある「ø」は音素ではなく、ゼロ形態素の三人称接辞を示すものである。音素表記に混ぜて書くべきではないが、動詞の人称変化を明示するために記した。なお、グロス (gloss) と日本語訳は筆者の手によるため、誤りは全て筆者に帰するものである。

ora ka aynu ø-arki yak pirka

それから 人 3S.-来る なら 良い

「今、娘さんが炊事をするから私たちが食べおえたら、それから人が来るのが良い」

田村 (1989: 50)

述部における二つの動詞のうち前部を V1、後部を V2 とすると、(1) は「V1+接続助詞(wa)+V2」<sup>2</sup>、(2) は「V1+V2」という動詞形式の配列で意味的に複合してひとつの述語としてふるまっている。これらは日本語の複雑述語である「V1 テ形+V2」(cf. 繋いでおく)や「V1 連用形+V2」(cf. 食べおえる)のような複合動詞と類似しているように見え、特にアイヌ語の「V1+接続助詞(wa)+V2」は日本語の「V1 テ形+V2」との機能的な類似性から日本語との接触による影響で発達した可能性が指摘されている(ブガエワ 2014: 65)。一方で、アイヌ語と日本語は形態統語的に異なった体系を有しており複合制約に相違がみられる。

本稿では、Role and Reference Grammar (以下 RRG) の枠組みにおける Layered Structure of the Clause (以下 LSC) からアイヌ語の複雑述語におけるふたつの動詞の関係にせまり、両者の形態統語的なレベルの接続や接合関係を明らかにする。そのうえで、それぞれの複合制約についても説明を試みたい。

## 2. 先行研究

「V1+wa+V2」、「V1+V2」の V2 に着目した機能の記述はこれまで多くなされてきたが、これらの構文の統語的な特徴についての記述は非常に限られる。

Bugaeva and Nakagawa (2013) は「V1+wa+V2」および「V1+V2」の構文について、通時的な変化の観点からこれらの構造の共時的なふるまいについて述べている。まず「V1+wa+V2」について動詞連続構造(SVC)との類似性に着目し、構文が単節的(monoclausal)であることを項の共有、否定のスコープ、関係節化の点から証明している。そのうえで、日本語の「V1 テ形+V2」よりも全体的に文法化が進んでいないこと、また、V1 と V2 はもともと等位構造(coordinal structure)にあったものが文法化を経て「V1+wa+V2」の構文を構成していることを指摘している。「V1+V2」についても同様に、形態統語的な基準から「主動詞 V1 + 助動詞 V2」の構造が単節的であることを示したうえで、共時的に V1 と V2 の配列が類似している補文節 V1 と主動詞 V2 の補文構造、自動詞からの転成名詞とそれを目的語に取る主動詞 V2 の構造および、これらが形態的に複合した動詞の構造と比較している。これらの分析を通じて「V1+wa+V2」と「V1+V2」は通時的に複節的(biclausal)であったものが単節的な構造に変化している点で共通する一方、前者は等位構造、後者は補文節構造から文法化したものである点で異なると指摘している。アイヌ語の複雑述語を機能のみならず統語的な点から分析し、通時的に二つの構文が異なっていることを明らかにした点で非常に画期的であるといえる。

<sup>2</sup> 接続助詞には多少のバリエーションがあるが、主に wa という接続助詞で結ばれるので、本稿ではこれを仮に「V1+wa+V2」構文と呼ぶ。

本稿では Bugaeva and Nakagawa (2013) の統語的な分析による単節性を RRG の LSC で示すことで、複雑述語として成立後の V1 と V2 の接続関係および接合関係（この点は後で説明）を明らかにし、これらが V1 と V2 の複合制約にどのように関わるかを考察したい。

### 3. RRG の基本概念

#### 3.1. RRG における節構造

Van Valin and LaPolla (1997) は統語構造を複雑に抽象化せず、単層的な統語表示を設けて意味表示と関係づけることで節の構造を明らかにする RRG を展開している。このなかで、節（clause）において述語的要素と非述語的要素という区分および名詞や接置詞句が述語の項であるかいないかという区分がすべての言語において統語的な役割を果たしているとして節に次のような層状の構造（Layered Structure of the Clause : LSC）を認めている。以下、Van Valin and LaPolla (1997 : 25-27) を要約する。

まず節には、節構造の中の統語的な単位を決める要素である述語（predicate）がある。そして、節には大抵いくつかの名詞句（接置詞句）が含まれているが、このなかには述語がとる項（arguments）と、そうではない非項（non-arguments）の別がある。LSC ではこれらの意味論的に区別される要素を、以下のような統語単位として示している。

Nucleus（中核）	述語
Core-Argument（内核項）	述語の意味的表示における項
Periphery（周辺）	非項要素
Core（内核）	述語 + 項（=nucleus+core argument）
Clause（節）	述語 + 項 + 非項要素（=core+periphery）

この LSC の統語単位を樹形図で表すと次のようなモデルとなる（Van Valin and LaPolla 1997 : 31）。

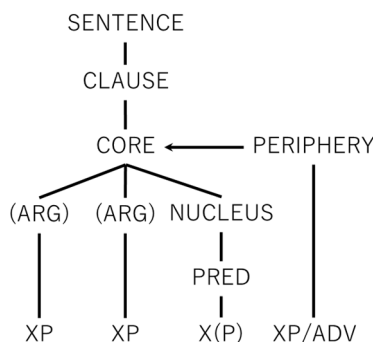


図1 LSC の形式表示

LSC の利点は、基本的に節構造に抽象的な深層構造を設けず、いわゆる表層形のまま統語レベルの分析が可能である点にある。このため、線状的な語順に依存した関係性はないために様々な語順に合わせた分析が可能である。形式表示には様々な細則があるが、後ほど必要に応じ

て述べる。本稿ではアイヌ語の複雑述語である「V1+wa+V2」および「V1+V2」における節構造の提示としてLSCを用いた分析を試みる。

LSCとあわせてRRGにおける接続(juncture)と接合(nexus)の概念についても先に述べておく。

### 3.2. RRGにおける接続と接合

単節(単文)である場合は図1で示したような比較的単純な統語単位の層で節の分析が可能であるが、複雑述語をはじめとした複文的構造においては、複数の述語がLSCのどのレベルで結合した単位を成しているかで統語的な区別が生じる。Van Valin and LaPolla(1997)は複雑構造の節について、LSCのどの統語単位で結合しているかによって以下の三つのレベルを設けている(丸括弧内は筆者が加筆)。

- a. [CORE ... [NUC PRED] ... + ... [NUC PRED] ... ]      Nuclear Juncture (中核接続)
- b. [CLAUSE ... [CORE ... ] ... + ... [CORE ... ] ... ]      Core Juncture (内核接続)
- c. [SENTENCE ... [CLAUSE ... ] ... + ... [CLAUSE ... ] ... ]      Clausal Juncture (節接続)

Van Valin and LaPolla (1997: 442)

複数(例えば二つ)の述語がみられる場合、互いに中核のレベル、内核のレベル、節のレベルのいずれのレベルで統語的にリンクしているのかを表すもので、このようにどの単位同士で結合しているかという概念が接続(juncture)である。

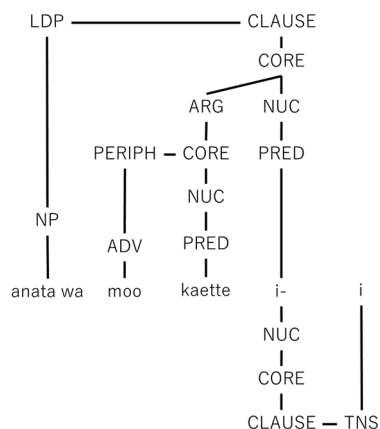
一方で、接続の関係にある単位同士がどのような接続関係(等位接続・従属接続など)にあるかを表す概念を接合(nexus)とよび、Van Valin and LaPolla(1997: 454)は英語や印欧語族による伝統的な従属接続(subordination)・等位接続(coordination)の他に、連位接続(cosubordination)を加えて広く言語の分析に対応させている。それぞれの接合タイプを単純化して示すと以下のような関係である。Van Valin and LaPolla(1997: 454)で図示されているが、同じ概念を埋め込み構造の点から整理して示しているHasegawa(1996: 46)に基づいて要約する。

まず二つの述語概念が埋め込み構造にあるかどうかで二分され、[+埋め込み]であれば従属接続となる。[-埋め込み]のうち接続される両形式のあいだに依存関係がない場合は等位接続、依存関係がある場合は連位接続となる。先に述べたそれぞれの接続のレベルでどのようなタイプの接合にあるかを見ることで統語的な結合関係を分類することができる。

例として、内核接続(core juncture)の場合の日本語の各接合タイプについてHasegawa(1996: 51-55)の分析を以下に要約して示す(日本語のLSCの樹形図は引用)。

a. [内核連接・従属接合] ([+埋め込み]、[+依存関係])

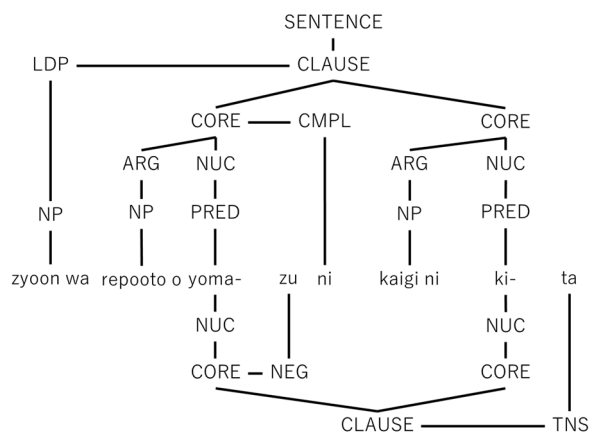
「あなたはもう帰っていい」



Hasegawa (1996 : 52)

b. [内核連接・等位接合] ([-埋め込み]、[-依存関係])

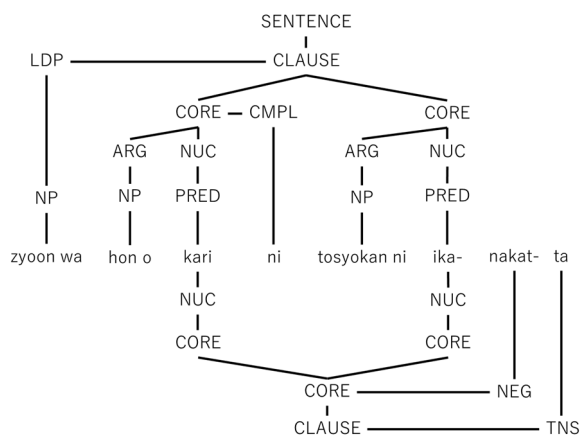
「ジョンはレポートを読まずに会議に来た」



Hasegawa (1996 : 54)

c. [内核連接・連位接合] ([-埋め込み]、[+依存関係])

「ジョンは本を借りに図書館に行かなかった」



Hasegawa (1996 : 55)

a は従属接合、b は等位接合、c は連位接合の例である。a は「もう帰って」という節が「いい」の項と分析されることから従属接合であり、b と c は内核 (CORE) レベルでの依存関係によって区別されている。すなわち、b の場合は内核レベルの否定のスコープが V1 のみであり V2 は依存していないのに対し、c の否定のスコープは V2 のイベントのみならず V1 と V2 全体をとっていることから依存関係が認められるといえる。時制は内核ではなく節レベルの依存であるため、内核接続の接合を考える上では除外される。以下、接続と接合の関係からアイヌ語の複雑述語構文を検討し、構文における V1 と V2 の複合制約について考察する。

#### 4. 分析

以下、アイヌ語北海道方言の南西部方言グループに属する沙流方言の資料<sup>3</sup>を中心に RRG の枠組みにおける複雑述語のアイヌ語の LSC を検討する。

##### 4.1. V1+wa+V2 構文

「V1+wa+V2」の構文において V2 には限られた語だけが立つが、V2 は自動詞の場合も他動詞の場合もある。ただし、自他両形ある動詞は自動詞の形式が V2 に立つことから、筆者は V2 には他動詞よりも自動詞が選択されやすいという一種の複合制約があると考えてきた。この構文の V2 には次のような動詞が立つ (なお、動詞形式に単複の別がある場合は単数形で代表する)。

まず、V2 が自動詞のパターンとして「V1 wa inkar (V1 てみる <inkar 見る)」、<sup>3</sup>「V1 wa inu (V1 てみる <inu 聞く)」、<sup>4</sup>「V1 wa arpa (V1 て行く <arpa 行く)」、<sup>4</sup>「V1 wa ek (V1 て来る <ek 来る)」、<sup>4</sup>「V1 wa an (V1 ている <an ある・いる)」、<sup>4</sup>「V1 wa isam (V1 てしまう <isam なくなる)」が挙げられる。また、V2 が他動詞のパターンとしては「V1 wa anu (V1 ておく <anu 置く)」、<sup>4</sup>「V1 wa okere (V1 てしまう <okere 終える)」、<sup>4</sup>「V1 wa kore (V1 てくれる <kore やる・もらう)」が挙げられる。これらは、沙流方言を記述した田村 (1972) や千歳方言を記述した佐藤 (2008: 86-89) においても補助動詞や助動詞的連語といった一連の形式として記述されている。

##### 4.1.1. V1+wa+V2 構文概観

上で示したとおり、V2 には自動詞も他動詞も立つ。V2 に比べてオープンである V1 には基本的に自動詞も他動詞も立つが、自動詞を Vi、他動詞を Vt とすると、(1) は「Vt+wa+Vt」、以下に挙げる (3) は「Vt+wa+Vi」、(4) は「Vi+wa+Vi」となるが、「Vi+wa+Vt」の組み合わせは「V1 wa kore」(V1 てくれる) 以外では基本的に用例が見られなかった (V1 wa anu 「V1 ておく」や V1 wa okere 「V1 てしまう」の用例では本稿の分析の限り得られなかった)<sup>4</sup>。

<sup>3</sup> 本稿の分析に用いた資料は拙論、岸本 (2016: 21-22) の資料情報に同じ。

<sup>4</sup> V2 が他動詞である「V1 wa okere」においても V1 に自動詞が立つことがあるが、この場合は V1 に他動詞が立っているときの「V1 てしまう」の意味ではなく「(属性や状態を表す自動詞 (形容詞) のあとに置かれて) 非常に / 極めて...である」(田村 1996: 462) というさらに文法化が進んだ用法となる。

- (3) nisatta ne a- $\emptyset$ -epotara wa inkar-an kusu ne  
明日 に 1S.SG-3O-被う て 見る-1S.SG よう  
「明日、私が(彼女を)お被いしてみましよう。」

田村(1989:40)

- (4) ney ta ka arpa-an wa inkar-an rusuy patek ki p ne a korka  
いつにか 行く-1S.SG て 見る-1S.SG たい ばかり する もの だ 完了 けれど  
「(父から絶対に行くなと言われてるが)いつか私は行ってみたいとばかり思っていたものだったけれど」

萱野(1998:12)

また、自動詞 V2 の「V1 wa isam」(V1 てしまう)において、V1 には人称で屈折した自動詞も他動詞も立つが isam「なくなる」は基本的に有標の人称標示が見られない。すなわち、(6)のように V1 が有標の主格人称標示であっても、isam は三人称の「 $\emptyset$ 」をとっている。

- (5) a-tekehe ta nea ray-tamanum oar  $\emptyset$ -ru wa  $\emptyset$ -isam.  
1S.SG-の手 で その 死んだ人の魂の粒 全て 3S-溶ける て 3S-なくなる  
「私の手の中でその死んだ人の魂の粒がすべて溶けてしまった。」<sup>5</sup>

- (6) pa ani a- $\emptyset$ -ronnu wa  $\emptyset$ -isam nankor.  
伝染病 で INF.S-3O-殺す[PL] て 3S-なくなる だろう  
「(村人はみんな)伝染病で殺されてしまうだろう。」

田村(1985:28)

以上のことから、「V1+wa+V2」構文において V2 で自動詞形式が優先される傾向、V1 と V2 の自他の組み合わせにおいて「自動詞+他動詞」の組み合わせが非常に制約的であるという傾向、「V1 wa isam」が他の自動詞 V2 と異なる人称標示のふるまいをする傾向がみられる。これらの複合制約を LSC の点から考える。

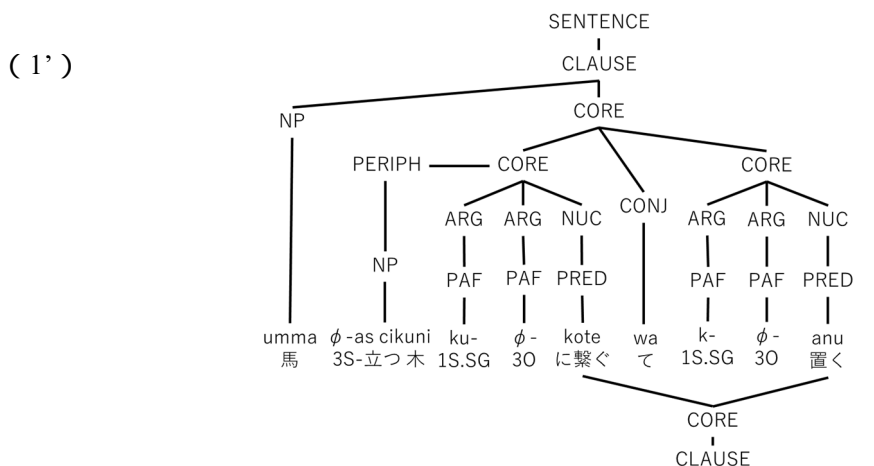
#### 4.1.2. V1+wa+V2 構文の LSC

V1 と V2 がともに人称で屈折しており形態的な独立性が高いことから、Anderson(2006)による助動詞構造(Auxiliary Verb Construcion: AVC)主要部類型の「二重型」に広くみられ

<sup>5</sup> 本来は「a-tekehe ta nea ray-tamanum oar isam, ru wa isam.」と言っているが、oar isam を ru wa isam と言い直していると判断できることから、はじめの isam を抜いて引用した。

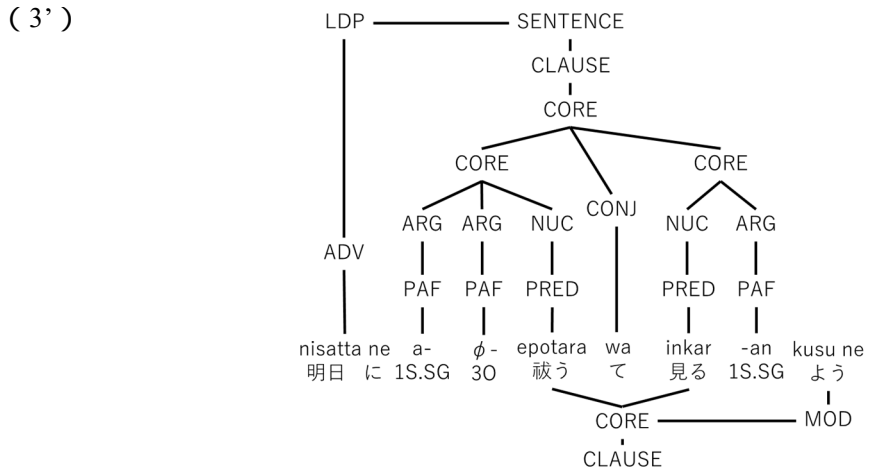
る内核レベルの接続であると仮定して樹形図を作成する<sup>6</sup>。なお、LSCにおける人称接辞の扱いは難しい問題であるが、人称接辞が義務的な要素であるのに対して実際の名詞句項は任意的な表示であることから、本稿では人称接辞 (personal affix : PAF) をひとまず内核項 (core-argument) として扱う<sup>7</sup>。

以下に、上述の (1) (3) (4) に対応する LSC の樹形図を示す。



umma as cikuni ku- $\emptyset$ -kote wa k- $\emptyset$ -anu ( Vt wa Vt )

「私が馬を立ち木に繋いでおいた」



nisatta ne a- $\emptyset$ -epotara wa inkar-an kusu ne ( Vt wa Vi )

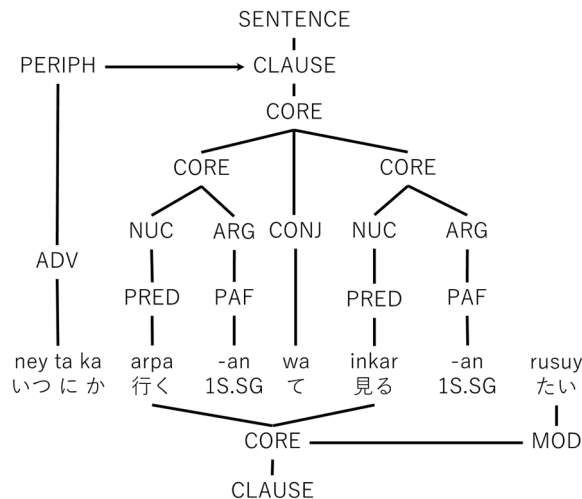
「明日、私がお祝いしてみよう」

<sup>6</sup> Anderson (2006) は LV と AV の形態統語的な主要部から AVC を類型化している。そのなかで LV も AV も屈折するパターンを「二重型」として分類し、このパターンは典型的に広く内核レベルの動詞連続から発達すると指摘している (Anderson2006 : 306)。

<sup>7</sup> Van Valin and LaPoll (1997 : 34) において、アイヌ語と同じ主要部標示型の言語である北米のラコタ語の動詞に標示される pronominal affix (代名詞的接辞) を core argument として分析し、名詞句は節内で独立した要素として扱っている。これは、ラコタ語において節内の独立した名詞句の存在に関わらず動詞に標示される項が非常に重要であるためとしている。ラコタ語の代名詞的接辞とアイヌ語の人称代名詞の形態統語的なステータスは異なる可能性があるが、本稿ではラコタ語に倣い人称接辞を core argument として扱う。ただし 3 項動詞における間接目的語の無標示やかばん形態素による複合的な人称標示など、アイヌ語の LSC での表示については今後も引き続き検討する必要がある。



(4')



ney ta ka arpa-an wa inkar-an rusuy (Vi wa Vi)

「いつか(私は)行ってみたい」

内核で接続していることは否定文により明らかになる。ただし「V1+wa+V2」構文のうち、「V1 wa an」(V1 ている)以外での否定文は非常に稀である。

(7) orano somo nep ø-ø-ye no ø-an ayne  
それから NEG 何も 3S-3O-言うて 3S-いる あげく

「それから、彼は何も言わないでいたあげく(言ったことかありき)」

田村(1986:10)

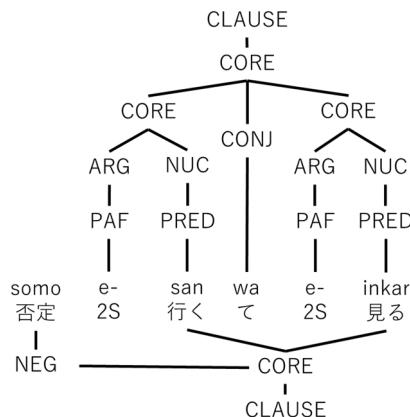
somo は否定の副詞である。「V1+wa+V2」の接続助詞 wa が no となっているのは、否定副詞 somo と呼応して否定の接続を表す形式だからである。また、非常に稀であると思われるが「V1 wa inkar」の否定の用例が1例得られたため、以下に LSC を示す。

(8) sirkap a-ø-rayke yak a-ø-ye wa ku-sisakpekaopas,  
ツノザメ INF-3O-獲ると INF-3O-言うて 1S.SG-行って手伝う  
somo eani hem e-san wa e-inkar?

NEG あなたも 2S-行くて 2S-見る

「ツノザメが獲れた言うので私は珍しいものだから行って手伝うよ、あんたも行ってみない？」

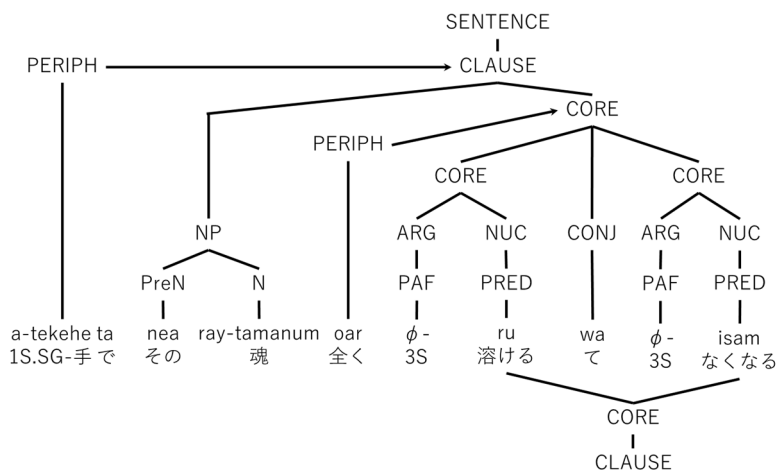
田村(1996:662)



接続助詞 wa は否定の接続形式 no にはなっていないが、否定副詞 *somo* のとるスコープは V1 の *e-san* 「お前が行く」だけではなく、*e-san wa e-inkar* 「おまえが行ってみる」という複雑述語全体である（V1 だけを否定して、それとは別に「お前が見る」という節があるわけではない）。このことから、「V1+wa+V2」は内核接続であるといえる。

内核接続が成立する場合、広く節内で項の共有が見られる。上で示した (1) (3) (4) (8) はそれぞれ共通して主格人称接辞の指す主語の項を意味的に共有している。しかし次のような「V1 wa isam」においては主語の一致というだけでは説明が難しくなる。(5) (6) を LSC で示す。

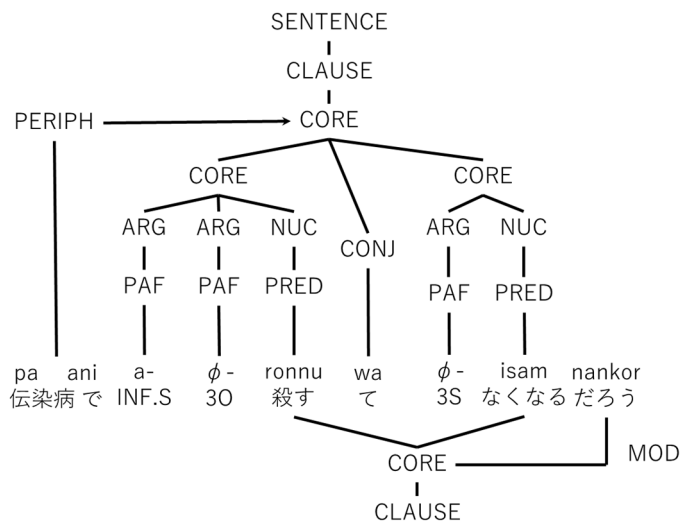
(5')



a-tekehe ta nea ray-tamanum oar ø-ru wa ø-isam. (Vi + Vi)

「私の手の中でその死んだ人の魂の粒がすべて溶けてしまった」

(6')

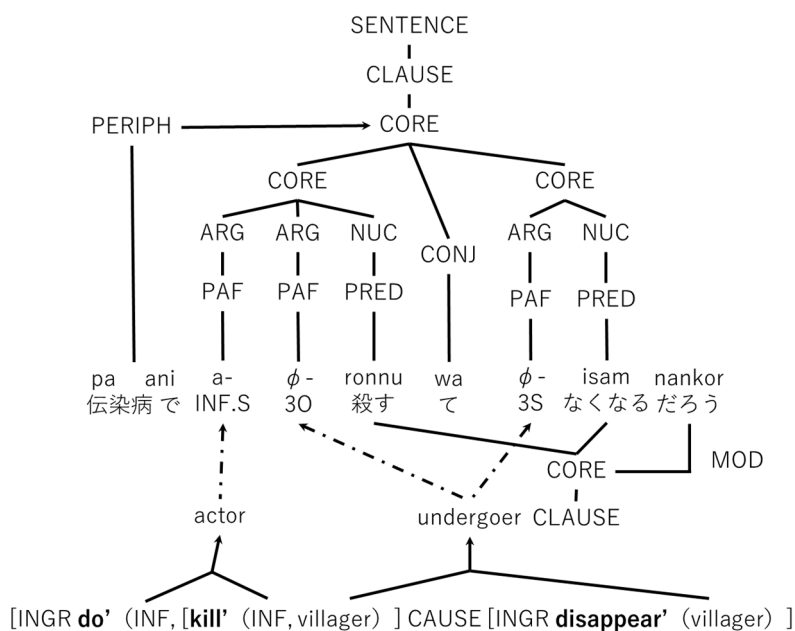


pa ani a- $\emptyset$ -ronnu wa  $\emptyset$ -isam nankor (Vt + Vi)

「(村人はみんな) 伝染病で殺されてしまうだろう」

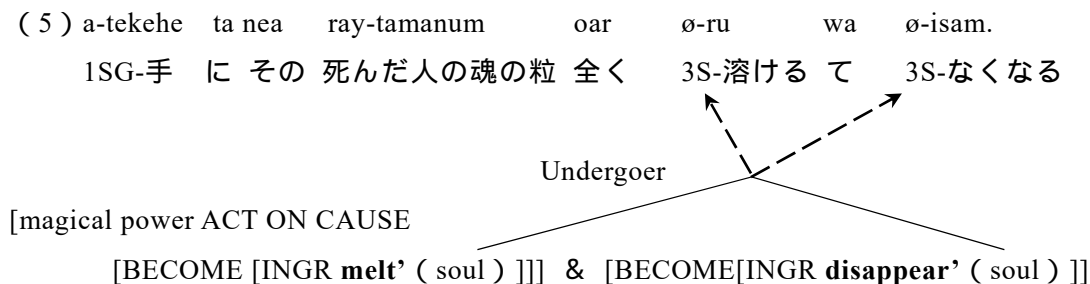
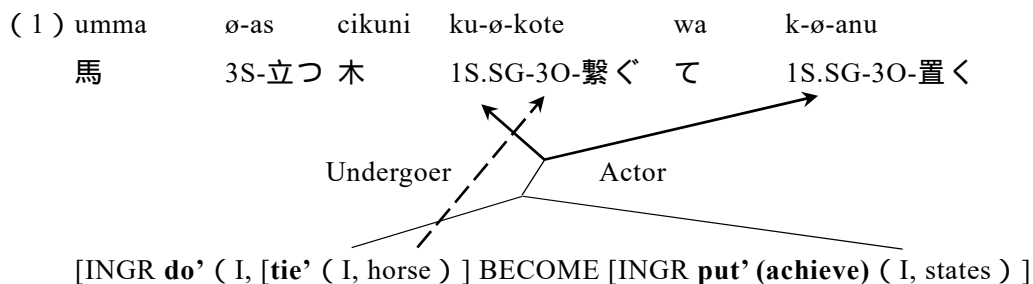
(5) は「nea ray-tamanum (その死んだ人の魂)」が ru「溶ける」と isam「なくなる」の主格人称と照応しているといえる。一方、(6) は同じ Vt+Vi の組み合わせである (3) とは少し異なっている。(3) の「a- $\emptyset$ -epotara wa inkar-an (私が彼女を抜ってみる)」は V2 の「inkar-an」が標示する一人称主格の項と、V1 の「a- $\emptyset$ -epotara」が標示する一人称主格の項が意味的に共有されているが、(6) は、V2 の「 $\emptyset$ -isam」が標示する三人称主格の項と V1 の「a- $\emptyset$ -ronnu」が主格で標示する不定人称が意味的に共有されていない。上の (6') を再掲して統語表示に意味表示をリンクさせると次のようになる<sup>8</sup>。

(6')



<sup>8</sup> 意味上の主語、目的語を明示する目的で Van Valin and LaPollla (1997) を参考にして意味表示を試みたが、暫定的なもので不適切な点も多々あると思われる。今後、より適切な表示ができるよう理論的理解と表示の試みを進めていく。

(6') から、V1 と V2 の項は受動者 (undergoer) の項が共有されていることがわかる。また、(5) は主語の共有をしているために (1) (3) (4) などと同様に見えるが、(1) (3) (4) は動作主 (actor) が共有されているのに対して、(5) は意味上の目的語 (内項) が共有されている点で異なり、(5) と (6) は同じシステムといえる。以下に (1) (5) を再掲して、簡略的に意味表示との対応を示す。



以上のことから、「V1+wa+V2」において共有される項は意味的主要部の V1 ではなく V2 の動詞によって決定されていると考えられる。

V2 に立つ inkar 「見る」、inu 「聞く」、arpa 「行く」、ek 「来る」、an 「ある/いる」、anu 「置く」、okere 「終わる」、kore 「くれる」は、いずれもその主語が動作主 (agent) または経験者 (experiencer) といった Actor に近い意味役割であり、一方、isam 「なくなる」の主語は被動的な主題 (theme) であることから Undergoer の意味役割である。

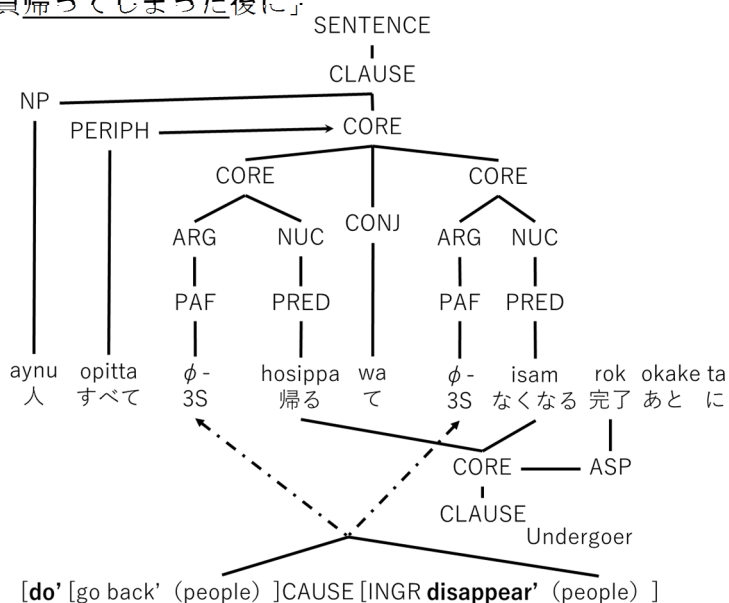
よって、アイヌ語の「V1+wa+V2」における項の共通は単なる「主語の一致」ではなく V2 の主格項の意味役割によって決定されることから、isam 「なくなる」のような非対格自動詞 (内項を主語とする自動詞) は、基本的に V1 に非能格自動詞 (外項を主語とする自動詞) をとることはないと考えられる。たとえば、「私が食べてしまった」という表現をする際に V1 を他動詞とした「k-ø-e wa ø-isam」という言い方はありえるが、V1 を自動詞とした「\*ku-ipe wa ø-isam」という表現は恐らくできないのではないかと考えられる。

また、arpa 「行く」や hosipi 「帰る」のような移動動詞が「V1 wa isam」の V1 として非常によく現れる。arpa 「行く」、hosipi 「帰る」などの移動動詞は主語が移動という事態における対象の意味役割を選択する一種の非対格動詞として捉えられる<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> 移動動詞の非対格性について査読コメントを通じて重要なご教示を賜った。深く感謝申し上げます。

- (9) aynu opitta ø-hosippa wa ø-isam rok okake ta  
 人 全員 3S-帰る て 3S-なくなる 完了 後 に  
 「人が全員帰ってしまった後に」

田村 (1989 : 20)



このことから、「V1+wa+V2」構文における項の共有が主格の意味役割のレベルである点、その決定が V2 の主格の意味役割に従うという点が確認される。残る問題としては「行く」、「帰る」のような移動動詞が V1 に立った場合に一人称主語、二人称主語の用例が一例もないことである。

本稿で分析した沙流方言の用例の限りでは V1 に自動詞の移動動詞をとる「V1 wa isam」(V1 てしまう)構文はすべて動作主が三人称か不定人称であった。移動の動作主が移動の対象でもあるという点からすると、三人称主語や不定人称の場合は isam の人称標示も三人称になるため問題はないが、もしも一人称や二人称がこれの主格に立った場合は isam もそれぞれの人称変化をする必要が出てくる。分析対象のテキストジャンルの偏りによる用例数の多寡という可能性もあるが、他の V2 と異なり一人称、二人称の用例が極端に得にくい(得られない)理由については検討する必要がある。

また、機能的に類似性のある「V1 (wa) okere」(V1 てしまう)との関係についても考えていきたい。

#### 4.1.3. V1+wa+V2 構文と複合制約

「V1+wa+V2」の複雑述語構文において観察される制約について、V2 に立つ形式は自動詞より他動詞のほうが制約的である点、V1+wa+V2 において「Vi+wa+Vt」の組み合わせが非常に制約的であるという点について若干の考察を試みる。

の制約は、例えばアイヌ語の「見る」という動詞には自動詞の inkar という形式と他動詞の nukar という二つの形式があるが、「V1+wa+V2」の構文においてはもっぱら自動詞の inkar が立つという観察事実にある。一方で、V2 には他動詞が立たないわけではなく、anu「置く」や okere「終わる」、kore「くれる」のような他動詞が V2 に立って意味的に複合している。

の「Vi+wa+Vt」が他の組み合わせよりも非常に制約的であるという事実も の制約と関連していると考え、これらを同時に説明づける必要がある。

ここまでの LSC での表示によって、「V1+wa+V2」は内核接続 (core juncture) であることがわかったが、あらためて Hasegawa (1996) の基準に合わせて接合 (nexus) 関係について確認すると次のようになる。

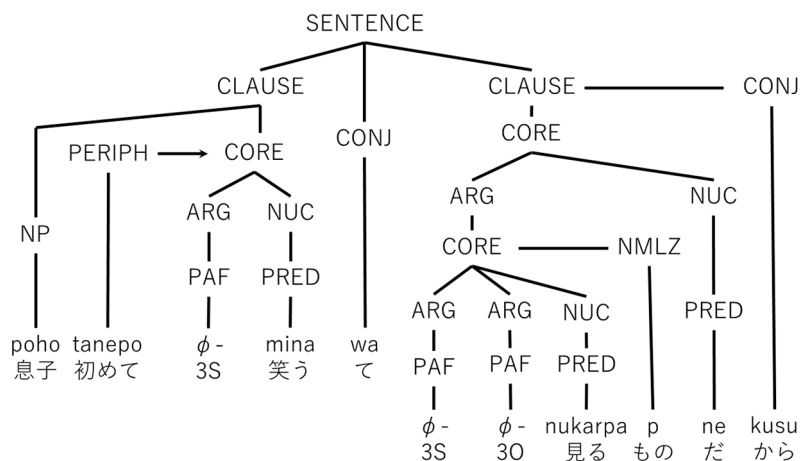
まず、V1 と V2 は意味的に複合して、特に V2 は V1 の意味に機能的な意味を追加する要素であることから等位接合ではない。また、「V1+wa+V2」において埋め込み構造はとっていないために従属接合でもないといえる。よって、アイヌ語の「V1+wa+V2」構文は内核接続の連位接合 (core cosubordination) であると考えられる。内核接続の連位接合について Hasegawa (1996 : 52) は「内核のレベルで埋め込み文ではない接合であり、ひとつの項が必ず内核の間で共有されなくてはならない」と述べており、この特徴に合致するといえる。

「Vi+wa+Vt」の自他組み合わせパターンが複雑述語としての「V1+wa+V2」構文に基本的に存在しない点について考えるにあたり、「Vi wa Vt」の配列にある文を LSC で以下に示す。

- (10) poho tanepo ø-mina wa ø-ø-nukarpa p ne kusu,  
 息子 初めて 3S-笑う て 3S-3O-見る[PL] もの だ から  
 ø-cis turano ø-ø-eyaykopuntekpa  
 3S-泣く 一緒に 3S-3O-喜ぶ

「( 殿様も奥様も ) 息子が今初めて笑ったのを見たものだから泣いて喜びました」

田村 (1968 : 16)



(10) は先に来る動詞 mina「笑う」が自動詞であり、接続助詞を挟んで後に来る動詞が他動詞 nukar の複数形 nukarpa「見る」である。(3) の「a-ø-epotara wa inkar-an (私が被ってみる)」(Vt+wa+Vt) と対照するとよりわかりやすいが、LSC で示すと(10)は節接続の等位接合 (clausal coordination) となり、内核レベルでの接続および連位接合は認められない。先述のとおり、「V1+wa+V2」の項の共有は V2 の主語の意味役割によって決定される可能性が高い。(10)の場合、nukarpa「見る」の主語は動作主の意味役割を持っていると考えられ、したがって共有される可能性があるとするれば V1 の自動詞の主語も V2 と同じ動作主でなくては

ならないが、この場合は異っている。仮にこの共有を満たしたとしても意味的な主要部ではない他動詞 V2 が単独で目的語の項をとる形になり語彙的な存在感が卓立してしまうため、V1 との意味的な複合が難しくなると考えられる。

以上のことから、「V1+wa+V2」構文において「Vi+wa+Vt」という配列は節接続の等位接合で解釈され、他の「Vi+wa+Vi」<sub>J</sub>、「Vt+wa+Vt」<sub>J</sub>、「Vt+wa+Vi」は複雑述語を形成する可能性のある動詞が V2 に立った際に内核接続の連位接合として解釈され得るという違いがあるために、「Vi+wa+Vt」という組み合わせのパターンが極端に制約を受け、V2 は他動詞より自動詞が優先されるという制約につながっていると考えられる。

#### 4.2. V1+V2 構文

「V1+V2」構文は V2 が人称で屈折せず V1 のみが屈折する点で、先の「V1+wa+V2」構文と形態統語的な特徴を異にする。V1、V2 には自動詞も他動詞も立ちうるが、V2 には他動詞から転成した助動詞が多く立つ一方、自動詞から転生した助動詞は非常に限られていることから、岸本(2016)は V1 と V2 の自他に一種の複合制約があると仮定した(詳しくは後節で述べる)。この構文の助動詞 V2 には次のような動詞が立つ。

まず、助動詞 V2 が自動詞のパターンとして「V1 tunas (V1 がはやい < tunas はやい)」、  
「V1 moyre (V1 がおそい < moyre おそい)」、  
「V1 ruy (V1 が激しい < ruy 激しい)」が挙げられる。また、他動詞のパターンとしては「V1 eaykap (V1 ができない < eaykap できない)」、  
「V1 easkay (V1 ができる < easkay できる)」、  
「V1 okere (V1 し終える < okere 終える)」、  
「V1 oyra (V1 し忘れる < oyra 忘れる)」など、田村(1960: 352-353)で挙げられる少なくとも 15 形式が認められる<sup>10</sup>。

##### 4.2.1. V1+V2 構文概観

上述のとおり V2 には他動詞も自動詞も立つ。V1 と V2 の自他の組み合わせも基本的には「Vi+Vt」<sub>J</sub>、「Vi+Vi」<sub>J</sub>、「Vt+Vi」<sub>J</sub>、「Vt+Vt」<sub>J</sub>のすべてのパターンで用例が得られた。(2)を再掲し、以下にそれぞれの用例を示す。

- (2) tane menokopo ø-suke                      wa ipe-an                      okere kor  
今 娘                      3S.SG-炊事する      て      食べる-1S.PL 終わる と  
ora ka                      aynu ø-arki                      yak                      pirka  
それから 人                      3S.-来る                      なら                      良い

「今、娘さんが炊事をするから私たちが食べおえたら、それから人が来るのが良い」

田村(1989: 50)

<sup>10</sup> 他動詞の他の例としては「V1 niwkas (V1 し残す)」、  
「V1 eraman (V1 がわかっている)」、  
「V1 eramewtek (V1 がわからない)」、  
「V1 amkir (V1 に覚えがある)」、  
「V1 eramiskari (V1 を見知らない)」、  
「V1 koyaykus (V1 ができない)」、  
「V1 eoripak (V1 に恐縮する)」、  
「V1 etoranne (V1 を面倒に思う)」、  
「V1 kopan (V1 を嫌う)」、  
「V1 sitoma (V1 を恐れる)」、  
「V1 eykesuy (V1 を嫌がってしない)」などが挙げられる。V2 に立つ動詞を網羅的に挙げることは難しいが、上記の動詞は分析したテキストに V2 として現れている。

- (11) iwak-an moyre kor i-etoko ta iwak-an pakno ø-an wa  
 帰る-1S.PL おそい と 1O.PL-の先に 帰る-1S.PL まで 3S.SG-いる て  
 「私たちが帰るのが遅いと(おじさんは)私たちの帰る先に私たちが帰るまでいて」  
 萱野 (1998c : 92)

(2) は V2 が他動詞、(11) は V2 が自動詞の例である。また、V1 と V2 の間には ka (「～も」) などの限られた副助詞が入りうる。

- (12) ø-en-nupurkasure hine ku-ø-ye ka oyra wa k-ek  
 3S-1O-わけわからなくさせる て 1S-3O-言う も 忘れる て 1S-来る  
 「(借金を取って来ようと思ったのに) 彼が私をわけわからなくさせて私は言うのも忘れてきた」

(12) のように副助詞 ka は、「V1+V2」構文において非常によく挿入される。(11) のような V1 の人称接尾辞や、このような副助詞の挿入によって V1 と V2 が形態的に複合していないことがわかる。岸本 (2016) は Aikhenvald (2006) で示された動詞連続構造 (SVC) の類型における「項の共有」という点において、アイヌ語の「V1+V2」構文が V2 の自他によって異なる構造であることを指摘した (V2 は形態的に不変化であるため、項は意味的に想定しうる範囲で検討した)。V2 が他動詞の場合は V1 と V2 の主語の項が意味上で共有されるのに対し、V2 が自動詞の場合は項の共有がみられないことから、SVC の類型から「V1+Vt」を “Secondary Concept Serialization”、「V1+Vi」を “Event-Argument SVCs” に近い関係であると示した (それぞれの特徴については後述)。

#### 4.2.2. V1+V2 構文の LSC

V1 が人称で屈折するのに対して V2 は人称の標示がみられないことから、「V1+wa+V2」構文とは接続、接合のレベルが異なると考えられる。また、V2 が他動詞か自動詞かによって V1 と V2 の項の共有の関係にも違いがあることから、この点においても LSC の構造が異なると考えられる。まずは、「V1+Vt」の構文からみていく。

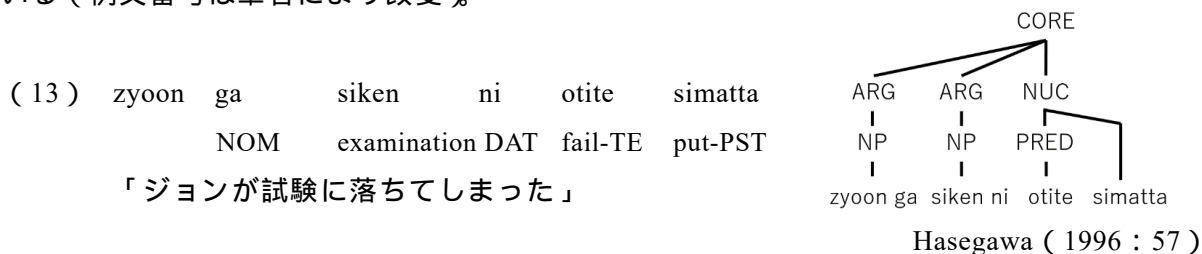
(2)、(12) は V2 が他動詞の構文である。形態統語的に V2 は不変化であるため、いわゆる表層上、V2 が項を取って内核 (CORE) を構成しているとは分析できず、V1 と接続してひとつの節を構成していることは「V1+wa+V2」構文よりも明白である。ここで注目すべきは (2) のような「自動詞 V1 + 他動詞 V2」が許されるという点である。先述のとおり「V1+wa+V2」構文では非常に制約的である自他の組み合わせであるが、「V1+V2」ではひろく用例がみられる (非制約的である) ことから、V1 と V2 はそれぞれに項を取っているのではなく、「V1+V2」という複雑述語全体で一連の項を取っているといえる。

この構文について岸本 (2016) は、V1 と V2 の関係 (特に V2 が V1 に対して統語的・意味

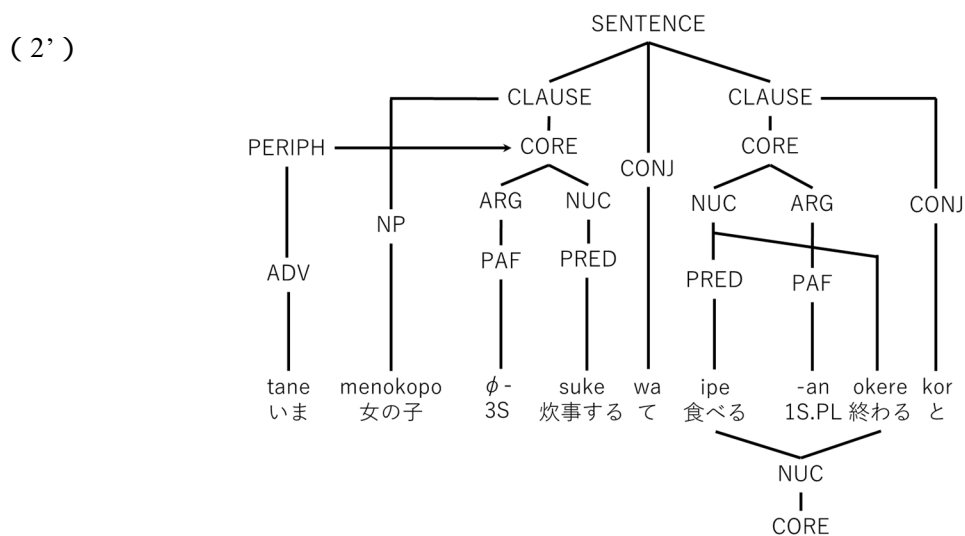


的にどのようにふるまうか) について、SVC での類型に基づき助動詞 V2 が他動詞の場合は “Secondary Concept Serialization” に近いものであるとして、V2 が自動詞の場合とは異なることを指摘した。この “Secondary Concept” とは、Dixon (2010 : 401-402) によると primary verb (主要部の動詞) に対して意味的な修飾をおこなう要素であり、primary verb に対して意味的な修飾をしても項を追加しない概念 (これを特に “Secondary-A concepts” と呼ぶ) であると説明されており、アイヌ語の「V1+V2」構文の V2 に立つ他動詞の多くもこの “Secondary-A concepts” に属するといえる<sup>11</sup>。

Hasegawa (1996 : 55-57) は日本語の「V1 テ形 + V2」の複雑述語を分析する中で、V2 が主動詞 V1 に対して意味的な修飾をしても項を追加せず、また V1 テ形と V2 の間に非常に限られた助詞しか入れない構文として「V1 てしまう」を例に挙げ、以下のように LSC を示している (例文番号は筆者により改変)。



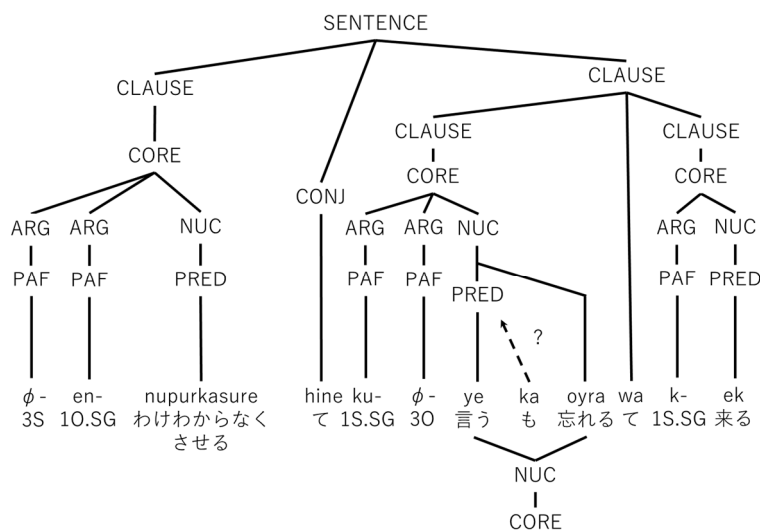
V1 と V2 の間に入る要素が非常に限られている点、V2 が独自に項をとらない点、V2 が V1 に対して意味的に修飾している点などから、(13) は中核接続の従属接合 (nuclear subordination) として分析されている。これは上で見てきたアイヌ語の「V1+Vt」構文と類似した特徴であり、また、“Secondary Concept Serialization” の特徴ともおおむね一致する。これを踏まえ、先に挙げた (2) (12) を LSC で表すと以下ようになる。



<sup>11</sup> Dixon (2010 : 401-402) は “Secondary-A concepts” を表す動詞として否定 (negators)、可能、義務など (modal-type)、「始める、続ける、やめる、終わる」など (beginning-type)、「試す、企てる」など (trying-type) が該当するとして、それぞれの持つ意味を primary verb に修飾的に添えて (多くは補文的な構造で) SVC を構成すると述べている。

tane menokopo  $\emptyset$ -suke wa ipe-an okere kor (Vi+Vt)  
 「今、娘さんが炊事をするから私たちが食べおえたら」

(12')



$\emptyset$ -en-nupurkasure hine ku- $\emptyset$ -ye ka oyra wa k-ek (Vt+Vt)  
 「彼が私をわけわからなくさせて私は言うのも忘れてきた」

(13) で示した日本語「V1 テ形+シマウ」構文との特徴の類似から、(2) (12) について上記のように LSC を示した。V2 が V1 に「項を追加しない」という性質のために「自動詞 V1+他動詞 V2」という組み合わせも許容されると考えられる。基本的に V1 の主語と V2 の主動詞の意味における主語は一致するが、これが中核レベルの接続であると考えれば、形態統語的に不変化である V2 の項を無理に想定する必要もなくなる。これにより、他動詞 V2 が助動詞として成立するためには基本的に V2 が“Secondary-A concepts”に相当する意味機能を有する語である場合となり、V2 には比較的多様な他動詞が立ちうることになる<sup>12</sup>。

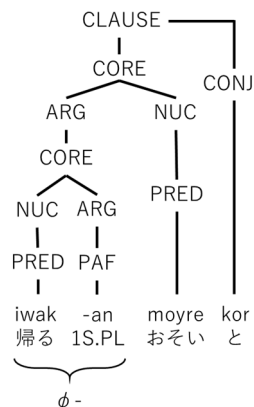
LSC の細部の標示にはいまだ誤りや不十分な点があるが、現時点では「V1+Vt」を中核連接の従属接合と分析しておく。

次に、V2 が自動詞の「V1+Vi」構文の LSC を考える。岸本 (2016) では統語的な特徴から「V1+Vi」の構文について、Aikhenvald (2006) の SVC 類型における“Event-Argument SVCs”に近い構造であると指摘した。“Event-Argument SVCs”の大きな特徴は V1 と V2 の間で項の共有がなく、V1 が表わす事象全体を V2 が項として取る点である。また、機能的には V2 が副詞のように V1 の事象全体にかかる構造である。これを LSC で表すとすると (11') のような樹形図が想定される。ただし、既に示した (11) のうち、複雑述語のある節のみを示す。

<sup>12</sup> 「V1+Vt」構文について okere「終える」や oyra「忘れる」などが V2 の場合、V1 を含む節を補文として項に取る構造（「V1+Vi」構文と同様の構造）である可能性について査読コメントを通じて重要なご指摘を賜った。「V1+Vt」構文の V2 の人称は常に主格・目的格ともに無標であることから、仮に目的格の項を V1 の補文節で埋めたとしても主格の項や人称が問題となるため、本稿では、自動詞 V2 が主格項さえ満たされればよい場合と構造をわけている。ただし、いずれも同じく従属接合であることを考慮し、より体系的な説明付けができるよう、V2 の自他で構造を異にするべきかどうか今後の課題として考えていく。

(11')

iwak-an moyre kor (V1+Vi)  
「私たちが帰るのが遅いと」



自動詞 moyre「おそい、おそくなる」の項として iwak-an「私たちが帰る（< iwak 帰る、-an 1PL）」というイベント（事象）を立てることになるので、moyre は「V1+Vt」構文のときのように形態的に不変化の助動詞ではなく、三人称（アイヌ語の三人称はゼロ形態素）で屈折した主動詞の可能性が出てくる。また、V1 と V2 の間に項の共有がない点から「V1+Vt」構文で示したような V1 と V2 がまとまった全体で項を取る中核接続ではなく、あくまで V1 は V1 で項を取り、V2 は V2 で項を取る構造が望ましいと考えられる。このとき、V2 が V1 の事象全体を補文節的に項として取ることによって意味的な複合がはかられる。このことから、「V1+Vi」構文は内核接続の従属接合（core subordination）であると仮定しておく。Hasegawa（1996：51）は内核接続の従属接合の特徴として、二つ以上の中核（NUC）それぞれが独自に項を取っていて、埋め込み節と主節の内核（CORE）の間では項の共有がないと述べており、「V1+Vi」の間の項の共有もこれに合致する。ただし、これがいわゆる補文節構文とどう異なるのかというのは問題として残る。

アイヌ語の補文節構造について、ブガエワ（2014：67）は以下のように端的に記述している（S は自動詞主語、O は目的語、A は他動詞主語）。

アイヌ語の補文は、統語的に S あるいは O として機能することができるが、A になることは稀である。補文と主節の接続は通常、補文標識によって標示される。補文標識には、英語の that のように特別な意味を持たないものや、補文の内容に特定の認識様態（epistemic）の含意を与えるものがある。

ブガエワ（2014：67）

上で述べた自動詞 V2（moyre「おそい」、tunas「はやい」、ruy「はげしい」など）は、V1 と接続して一つの述語としてふるまう際に基本的に補文標識が現れない。ただし、沙流方言のテキストを分析した限りでは一例のみ以下のような補文標識 hi が現れる例があった。

(14) na cep -hemespa hi -moyre kusu ne kuni a-ramu wa  
 まだ 魚 3S.PL-のぼる CMPL 3S-おそい から だ と 1S.SG-思うて  
 「(魚が少ないのは) まだ魚が川をのぼるのが遅いからだと私は思って」

田村 (1989 : 64)

(14) と先の (11) のような例にどのような違いがあるかは現時点では判然としない。また、補文標識があるかないかに関わらず「V1+Vi」の用例 (Vi に立つ動詞) が非常に限られていることから、単に補文節構造に似た構造であるというだけでは制約の説明がつかない。すなわち、単なる補文節構造であるならば V1 の表す事象を修飾する様態を表す動詞がもっと制約なく V2 に立ちうるはずである。中核接続であるか内核接続であるか (もしくはその他の可能性も含め) について、より統語的な点から証明していく必要があるが、現時点で得られている「V1+Vi」構文の用例にはこれを可能にする否定やモダリティなどを表す要素が明示的な形で含まれていないため、今後の用例の追加を待って検討していきたい。なお、この構造は Bugaeva and Nakagawa (2013) による「V1+V2」構文は補文節構造が文法化して生じたという通時的な分析と一致する。

現時点では理論の扱いに不十分、不適切な点があるが、「V1+Vi」構文を内核接続の従属接合と捉えることで、V1 と V2 それぞれが形態統語的にある程度独立していると見ることができると見られる。また、V1 の事象全体を自動詞 V2 が項としてとることから、様態を表す V2 が副詞的に V1 の内容を修飾しており、意味的にも複合していると考えられる。

## 5. まとめと今後の課題

以上、アイヌ語の「V1+wa+V2」構文と「V1+V2」構文における V1 と V2 の接続関係および接合関係について、LSC を用いた構造表示を試みた。その結果、現時点で判然としない点や理論的に筆者の分析が不適切な箇所もあるが、以下のような構造の相違がある可能性を示した。

「V1+wa+V2」構文	内核接続・連位接合
「V1+Vt」構文	中核接続・従属接合
「V1+Vi」構文	内核接続・従属接合

これにあわせて「V1+wa+V2」構文における自他の複合制約および「V1+V2」構文の V2 における自他の違いによる制約について若干の考察をおこなった。前者は「Vi+Vt」という自他の組み合わせが極端に制約を受ける理由として、この場合に節接続の等位接合として解釈されることを示し、その他の自他の組み合わせでは内核接続の連位接合と解釈されることから「Vi+Vt」の組み合わせが項の共有の点で複雑述語の形成に向いていないことを示した。また、後者の「V1+V2」構文における V2 の自他による制約の差については、接続のレベルの違いが関係していると考えているが、現時点ではそれぞれの接続・接合タイプの統語的な裏付けが不十分であることから、以下の点を中心に上記の接続・接合タイプの妥当性を検証していく必要がある。

すなわち今後の課題として、本稿のように RRG を言語分析に導入するにあたって基本的

な条件となる接合 (nexus) について、アイヌ語でどのように証明するかという基準の設定が必要である。接続関係については否定のスコープや関係節化などの LSC における文法的な表示 (operator projection) によってある程度の証明が可能であると考えられるが、特に「V1+V2」構文についてはこれについて適切な用例を得られていない。今後もそれぞれの接続・接合タイプの妥当性を裏付けられるよう、統語的なレベルでの分析を進めたい。

また、アイヌ語の補文節構文と「V1+V2」構文との関係についても本稿では十分に検討できなかったが、「V1+V2」構文の接続と接合の関係を明らかにするうえで非常に重要な点であることから、今後ともアイヌ語の補文節構造、複文構造の研究とあわせて検討していきたい。

#### 謝辞

本研究は日本学術振興会科学研究費 (特別研究員奨励費、課題名「アイヌ語の補助動詞に関する記述言語学的研究」、課題番号: 14J04824、研究代表者: 岸本宜久) の助成を受けた。本稿の執筆にあたり指導教員である佐藤知己先生をはじめ北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座の先生がたに懇切なご指導・ご助言を賜った。また、査読者の方々からも貴重なコメントを賜った。この場を借りてお礼申し上げる。

#### 略記号一覧

1/2/3...1<sup>st</sup>/2<sup>nd</sup>/3<sup>rd</sup> person、ø...3rd-person affix(zero-morpheme)、ADV...Adverb、ARG...Argument、ASP...Aspect、AV...Auxiliary Verb、CMPL...Complimentizer、CONJ...Conjunctive Particle、DAT... DativeINF...Indefinite (personal affix)、INGR...Ingressive、LDP...Left Detached Position、LV...Lexical Verb、MOD...Modality、NEG...Negation、NP...Noun Phrase、NUC...Nucleus、O...Objective、PAF...Personal Affix、PERIPH...Periphery、PL...Plural、PRED...Predicate、PreN...Pre-nominal modifier、PST...Past Tense、S...Subjective、SG...Singular、Vi...Intransitive Verb、Vt...Transitive Verb

## 参照文献

- 萱野茂 (1998) 『萱野茂のアイヌ神話集成：ウウエペケレ編 I』 4. 東京：平凡社.
- 岸本宜久 (2016) 「アイヌ語沙流方言における動詞の助動詞用法と制約」北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター 『北方人文研究』 9. 17-38.
- 佐藤知己 (1995) 「アイヌ語の受動文に関する一考察」 『北海道大學文學部紀要』 44(1). 1-18.
- 佐藤知己 (2008) 『アイヌ語文法の基礎』 東京：大学書林.
- 田村(福田)すず子 (1960) 「アイヌ語沙流方言の助動詞：アイヌ語の助詞についての報告その 1」 『民族學研究』 24(4)：67-78.
- 田村すず子 (1972) 「アイヌ語沙流方言における《...して...》の表現」 『國學院雜誌』 73(11). 147-163.
- 田村すず子 (1985) 『アイヌ語音声資料』 2. 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1986) 『アイヌ語音声資料』 3. 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1989) 『アイヌ語音声資料』 6. 東京：早稲田大学語学教育研究所.
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 東京：草風館.
- 服部四郎 (1964) 『アイヌ語方言辞典』 東京：岩波書店.
- ブガエワ アンナ (2014) 「北海道南部のアイヌ語」 児島康宏・長崎郁(訳) 『早稲田大学高等研究所紀要』 6. 33-76.
- Aikhenvald, Alexandra.Y. (2006) *Serial Verb Constructions in Typological Perspective*, In: Aikhenvald, A.Y & Dixon R.M.W (eds.), *Serial Verb Constructions A Cross-linguistic Typology* : 1-68. Oxford University Press.
- Anderson, Gregory D. S. (2004) *Auxiliary Verb Constructions in Altai-Sayan Turkic*. Wiesbaden : Harrassowitz.
- Anderson, Gregory D. S. (2006) *Auxiliary Verb Constructions*. Oxford : Oxford University Press.
- Bugaeva, Anna, and Nakagawa, Hiroshi (2013) *V-V Complexes in Ainu*. MYSTERIES OF VERB-VERB COMPLEXES IN ASIAN LANGUAGES, NINJAL INTERNATIONAL SYMPOSIUM 2013, December 14-15. (the presentation handout)
- Dixon, Robert M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory*, 2 : Oxford University Press.
- Hasegawa, Yoko (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage -The Connective TE in Japanese*. Tokyo : The Center for the Study of Language and Information Publications.
- Van Valin, Robert, and LaPolla, Randy (1997) *Syntax -Structure, Meaning and Function*. New York : Cambridge University Press.

## 執筆者紹介

氏名：岸本宜久

所属：北海道大学大学院文学研究科博士課程

Email：kishi.dosanko@gmail.com